

# 観 音 土 日

昭和60年7月

第3号

年2回発行

編集発行

小出真行



不動明王

人はそのからだの中に本来浄らかな  
仏たるべき性格も備えている

(秘蔵記)

裸にて生まれた来たに



何不足



人の生き方には二通りあって、一つにどうせ短かい人生だから、なるべく太く短かく生きようとする考え方と、命短かい人生であるから、できるだけ有意義に生きようとする考え方がありますが、この川柳は、いつも無の出发点、つまり原点に還るべきことを教えています。自分は自分、他人は他人ということではなく、自分の生命の限らない燃焼が他人への温かい眼ざしとなり、慈しみのはたらきとなっているのです。

そして、自分自身をもう一度見つめ直して原点にかえってゆきたいものです。

舍利子 色木異空 空不異色  
色即是空 空即是色  
受想行識 亦復如是



(舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色は即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識も亦復是の如し)

「舍利子よ」とは、お釈迦さまの十六弟子の一人で智慧第一といわれたのがこの舍利弗です。お釈迦さまはこの弟子の舍利子に呼びかけています。

「色は空に異ならず、空は色に異ならず」とは、目に見える現象(出来事)には実体(本当の姿)がないことで、物質的な存在は現象としてとらえることが出来ますがそれは無数の原因と条件によって絶えず変化しているのですから変化しない実体はないのです。例えば、最愛の人がいるからといって、いつまでもその人が自分のそばについてくれるとはかぎりません。それが愛し合っているからといって、その原因と条件が変われば相手か自分のどちらかが離れていくとも考えられ、愛が、反対に憎しみに変わることもありうるのです。ですからこの世の中に存在するありとあらゆるもののどれ一つとってみても変わらないものではなく、刻一刻と絶えず移り変わってゆくものなのです。

この世の中に存在するものの実体がないと

いっても、私達が生きている限り目に見える現象を通してしか、その実体というものは見えないのでありますから、現象を不変なものとして仮定して考えざるをえません。目に見える現象を仮りに有るものと考えますと、例えばいくら地球が相当な速度で回転しているにしても、その上に生活を営んでいる私達は、あたかも地球が動いていないかのように錯覚しながら生きているようなものなのです。

「色即ち是れ空なり、空即ち是れ色なり」とは、目に見える出来事そのものに実体はなく、実体のないものがすなわち目に見える現象そのもので、この二つは別の物ではありません。

中国の賢首大師が「心経略疏」に「色即是空と見て大智を成じて生死に住せじ、空即是色を見て大悲を成じて涅槃に住せじ」と説明していますが、目に見える現象や実体のいずれにもとらわれず、この両方をふまえて全てのものを含めに見る仏眼がそなわなければならないことをすすめているのです。

「受と想と行と識も亦復是の如し」とは例えば、人間をかりに精神と肉体の二つに分けると、肉体を「色」といい、色とはどんな場合でも形あるものでその形には何らかの色彩を持っていますので「色」といいます。

次に精神のほうは、「受」という感覚感情、「想」という(長短、大小、苦楽はこういう

ものであると心に思い浮かべて了解する作用)概念、「行」という意志の作用や活動、「識」という認識する作用がそれぞれ固有のはたらしをしながら寄り集まって形成されているのが、人間をはじめとする全ての「存在」なのです。ちよっと見ると確実に存在している何かがあるように見えますが、ただそう見えるだけで、この五つのものがパートになって集まって合成されていますので実体はなく、集まったのですから必ず散って行きますので「空」でない存在は一つもないということなのです。

要約しますと、お釈迦さまが舍利弗に、この世においては、物質的な現象つまりかたちあるもの(色)には実体(本当の姿)がないのであり、また実体がないからこそ、物質的な現象があり得るのです。実体がないからといって、物質的な現象を離れてではなくまた物質的な存在は実体がないことと離れて存在しないのです。そして物質的な存在は絶えず互いに関係しつつ現象としてもその実体としてとらえることは出来ないのです。

このようにして、物質的な現象は、全て実体がないことなのです。逆にいえばおよそ実体がないということは、物質的現象なのです。これと同じように、感覚も概念も意志も知識も全て実体がないということなのです。



## お盆のいわれ



お盆はくわしくは盂蘭盆会といい、古いインドの言葉に「さかさにつるされるような苦しみ」という意味の「ウランバナ」という言葉があります。盂蘭盆会とは、そのような苦しみを救うための供養ということ。今では日本各地での伝統的な先祖崇拜、感謝追憶（自分が生かされている事についての全てのことに感謝する）の国民的な行事にまで発展しています。関東では七月、関西では八月の十五日を中心として、お墓まいり、養父入りの行事となつて、仏教に全く無関心な人でも、一つの習慣になつていようです。

一般的には、八月または七月の十三日に亡霊がこの世に還つて来るといって、家の内外に火を灯してこれを迎え、十四・十五の両日は亡霊がそのまま家に止まっているとして、位牌の前に新鮮な果物や野菜等をお供えして、灯籠を吊してこれを慰め、十六日の夜は亡霊が再びこの世を去る日であるとして、内の外や河の岸に松火を灯したり、供物や灯籠を川に流したりします。（広島では原爆の日八月六日に灯籠を流して原爆で亡くなった霊の供養を致します）また上俗神道と結びつけて盆会のことを、霊祭り、精霊祭り、おしようさん、などと呼ぶこともあります。特に京都の「大文字のおくり火」は有名で皆様も御存知だと思ひます。

そもそもこのお盆のいわれは「仏説盂蘭盆經」というお経によりますと、お釈迦さまの十大弟子の一人である日蓮尊者が神通力を得られた時、私は亡くなった父母の恩に感謝がしたいと思われ、死後の世界を捜してみますと、その母が生前の業報によって、餓鬼の世界におられ、飲食が得られず、骨と皮にやせておられました。日蓮尊者が鉢に食事を盛つて差し上げたところ、なんと口に入らないうちに火炭となり、水を差し上げるとたちまちに火となつてしまつたのです。日蓮尊者は嘆き悲しみ、お釈迦さまにこのことを申し上げるとお釈迦さまは

「汝の母は罪業ふかく、汝一人の力では汝の孝行の力が天地を動かしたとしてもいかんともすることが出来ない。ただ十方の衆僧の威神力のみがこれを救うであろうから、汝は七月十五日、衆僧の懺悔の修福日、汝は、七世の父母と現在の父母のために、飲食、百味（御馳走）などを盆に供えて供養せよ」

と教えました。日蓮尊者は、その教えに従つて衆僧に御馳走を差し上げ供養いたしましたところ、母は餓鬼道より逃れることが出来たのです。

お釈迦さまはその時「この日をもって、一切の人々が現在および七世の父母の供養をなせ」と説かれたというのがお盆のそもその始

まりといわれています。

ところで皆様は「因果応報」という言葉は御存知ですか、「因果応報」ということは、生前に善行をなした者は六界の天、人間、阿修羅の世界に生まれ変われる事が出来、悪行をなした者は、地獄、餓鬼、畜生の世界におち、自分の犯した罪が消えるまで、長い間その世界で苦しまなければいけません。その中で餓鬼のすむ餓鬼道とは、地獄よりは苦しみの少ないところですがやはり苦しみの世界といふことには変わりありません。むさぼりの罪を犯した者が餓鬼道におちるといわれています。体の内部に熱い火が充満して身を焼かれる餓鬼、人間の嘔吐物しか食べられない餓鬼、海の中の孤島に生き、朝露しか飲めない餓鬼、口が針の穴のように小さく、食物が食べられない餓鬼など様々な餓鬼が飢え苦しんでいます。このように餓鬼の苦しみは、飢え、つまり食物への欲望がかなえられない苦しみとして表現されていますが、それは私達人間が持っている全ての物事への満足ということを知らない欲望の象徴とはいえないでしょうか。

今、世界の人口の半分が飢えているといわれています。水さえ飲む事が出来ず苦しんでいる人が多勢いることは新聞紙上でも報道されています。餓鬼道は、私達が考えている以上に身近にあるのではないのでしょうか。餓鬼は、餓鬼道にだけ住んでいるのではなく、ま

た必ずしも餓鬼の姿かたちをしているのではありません。餓鬼とは満足を知らない、そして感謝することを知らない生き物全てにいえることではないでしょうか。餓鬼の心しか持たないものは、たとえどの様な立派な住居に住み、きらびやかな美しい姿をしていても餓鬼なのです。私達の今日あるのは、自分自身の努力もありますが、他の多くの人々のおかげ、大自然のおかげ、仏さまのおかげなのです。私達が毎日、何気なく口にしてる食物は、お米、肉、野菜、魚もみな一個の生命を持って居るのです。私達は自らの生命を犠牲にしてゆくためにこのような多くの生命を犠牲にしています。自分の生命と同じように他の生命も大切なのです。他の生命を尊重し、そして感謝することを忘れた時、私達は餓鬼の心になって居るのです。どうぞ、全ての恵みに感謝する日々を送りましょう。そして、日常こんなことをしてもらうのはあたりまえと思えるようなことがあっても、感謝する心を忘れないようにすることが餓鬼の心を捨てる第一歩ともなるのです。

ともあれ、現在ではとかく孝行とか報恩ということをないがしろにされがちになってきていますが、せめてお盆くらいには先祖の恩、自然の恵に感謝する気持ちを起こさせたいものです。そして現在「生かさされてる命」を大切に日々を精進していきたいものだと思いますか。

### 絆 (つながり)

人間というものは決して一人で生きて行けません。多くの人と何らかの係り合いを持ちながら様々な「つながり」で生きて居るので。ではどの様に、その人と人との「つながり」を深めていくかといえますと色々ありますが、一つに反人間志のごく個人的な「つながり」もあり、また隣近所の社会的なものから親戚同志の家を中心としたものもあります。いずれにしても社会の一員である私達は人との「つながり」なしでは生きて行けないものですから、良い「つながり」を多く持つことがしいてはその人を幸福に導いてくれるのではないのでしょうか。

「つながり」というものは、お互いに話をしたり、手紙や電話のやりとり、飲食や旅行を共にすることや、あるいは品物を贈答することにとらわれてはいますが、それがただ形だけのものではないば義理的な配慮で行なわれて居るのならば本当に味気ないものになって次第に無意味になりかねないのです。従ってただ形に現れることより、内面から湧き出る様な温いぬくもり（心情）が大切なのです。

仏教では「無財の七施」という教えがありますが一つに

人をにらんだり、怒ったりする悪眼ではなくいつも人に対してやさしい目を向けることの出来る眼施

しかめ顔やうれい顔を人に見せずいつもにこやかな笑顔で接せられる顔施  
誰にでも親切で柔かな言葉をかけ相手の心をうるおす言施  
困った人の手助け、例えば病弱者や老人に手を貸したり、人の道案内や重い荷物を持ってあげられる身施  
相手の人に対して思いやりや愛情を持つ心施（老人や病人や心配事のある人は一寸したやさしいいたわりに涙ぐんで喜ぶものなのです。）  
バスや電車に乗った時お年寄や小さな子供に進んで座席を譲ってあげられる座施

不異のお客さまにも気持よく迎えてあげられる舎施  
があります。

この七施こそ本当の意味での人と人との「つながり」をより一層深めてくれる秘訣ではないのでしょうか。

ややもすれば自分本位の考えに執着しがちな私達ですが、相手の立場になって考え行動の出来る「おもいやり」が大切に思えてなりません。そしてそうした相手の立場に立って物事を考える事が出来る精神的な心の「ゆとり」が欲しいものです。

### 編集後記

皆様方の、考え方や人生論等を記載致したく思いますので、どうぞ申し出て下さい。